

樽流俳句選抄（春季雑詠）

選者 今津大天 先生

佳作

桜咲く新妻新居慎ましく	柴田文花
椿落ち波紋描きつ流れ行く	二村秀香
丹精の盆梅ならべ南窓	額久峰
菊根分け忘れぬ内の名札かな	岩間芳泉
軽やかに音色せせらぐ春の川	早津郁男
雛飾る坊もどこやら畏まる	青木凡舟
赤白黄名札を頼り菊根分け	柴田小舟
幼子の指差す先にすみれ草	波多野妙生
初土を割いて顔出す露の臺	長尾桜香
黄砂来て近くて遠い子等の声	御田村光女
国盗りの山もけぶらす春時雨	杉山多美
筆の手を暫し休めて初音聞く	亀山秀月
穂の芽や母の自慢の味噌の味	亀山優花
下校児が道の蒲公英絮を追う	後藤松月
入学に付き添う親は恵比須顔	熊谷詠月
亡き妻と桜狩りする夢を見る	林 巴城
寅年の春一番や大樹揺る	兼氏翠月

（地位）

独り者軒に同居の燕来る 亀山則天

（評）独り者の家にも燕が来る、というのに、と合点した。更に、その燕を「同居の燕」と、とところに俳諧味があつてよい。今では燕が来て汚すのを嫌う家が多いが、この句は、かえり人暮らしの無聊を慰めてくれるものとして歓迎している様が浮かんで来て好ましい。「同居の」は年同じ燕の家族がやうて来ることを表している。も知れない。

（天位）

春暖の軒に広げる初袋 村瀬昇竜

（評）もうすぐ初まきの季節がやってくる。春かい日に、しばらく水に浸してあつた初袋を、筵の上に初を並べて水を切っているのだろう。今は、初蒔きも機械ですることが多いが、初蒔作業を知っている者には、この句の簡明な表現で、その手順や光景を想像することが出来る。塩水選をした初を苗代に手で均一に蒔いた。ある。この句を読んで、懐かしい光景と共に働く姿が、一挙によみがえってきた。

七客

堅香子が俯き並ぶ急斜面
 遺産屋根結いの力で葺き替える
 末の子に生れて跡継ぎ梅の花
 ビバルデの流るる園や春日和
 朝日受け土筆の筆の背が揃う
 梅香る宮居に吊す恋の絵馬
 茶摘み歌流れ試飲の道の駅

三光

（人位）

奥美濃の城下の町に集う雛
 （評）奥美濃の城下町とは郡上のどこか一箇所に集めて供覧に付す、と思ひます。歴史のある街には様うして一堂に並んでいるのは壯観で、齊におひな様が飾られることはあつ「集う」というのが珍しく、特別かいると思ひました。

（追記）今回、冬と新年の季語、という夏の季語の句がありました。の句は「はつに」と読むので、ずになつていきます。

選者吟

春の田をブルドーザーが押してゐる

樽流俳句次号応募要領

- 一、夏季雑詠（ひとり三句）
- 一、締切り令和四年四月末日厳守
- 一、用紙 郵便ハガキ（句料無料）
- 一、所属社名・雅号名記
- 一、樽流会員変名不可
- 一、投句所 〒504、0934
- 一、各務原市大野町一丁目一二〇
- 一、岩田華泉宛
- 一、電〇五八、三八二、七七二五

天野桂花
岩田紀正
多和田瑠璃
永縄一紅
波多野寿鳥
井戸幸女
野田春香

谷藤尚花
ことでしハニ
ところがあッ
々なおひな様
しハう。家ハ
るが、おひハ
な土地柄を

及び「初節句」
「また「初」
上五が字足

大天

樗流俳句選抄本（春季雑詠）

梅村 五月

佳作

しみじみと孫の入試で知る速さ 高橋照笑
 静けさやみなうたた寝の置炬燵 御田村光女
 伊那街道車窓にバミと桃の花 畑佐楽人
 愛くるし孫と雛壇祝い酒 二村秀香
 蓮華田を車で廻りて木曾の旅 河村花玉
 酒仕込み終へ古里へ杜氏帰る 服部利水
 露味噌の香り仄かに里の味 井戸幸女
 懐かしや肩車寄せ会ひた桜道 山内澄香
 久し振り地下足袋履いて畑を打 柴田小舟
 地桜の開花を告げる紙面満つ 後藤松月
 散歩道はや蒲公英を見つけたり 長尾伎与子
 参道の花を楽しみ宴の輪 国枝紫陽
 ひとせの辿るは早し初つばめ 永縄一紅
 爛漫の春は津軽の海を越す 青木凡舟
 春光や老いに喜び運びくる 波多野妙生
 お花見の家族が群れる長良川 寺田登仙
 髪切りて春風まとふバスの旅 兼氏佐代子

〈地位〉

パンジーにスマホを向ける古い 岩田華泉
 〈評〉 本年は温かいのでパンジーがいじせい
 に咲き揃った。
 老人の皆さんもスマホを駆使されるよう
 なった。
 歓声を挙げているのは、「老いの群れ」と
 断定された点が景となりつつたわじてくる。
 〈天位〉
 わらび狩り携帯電話で話をり 林 巴城
 〈評〉 便利な世の中になった。
 わらび狩りに携帯電話を使い教え合
 っているのだ。
 「おーい、そちは沢山採れるか」「あ
 な、白い岩があるあたりにいじばい生えて
 いるのでこちらへ来いよ」と位置を知らせ
 合っているのだ。
 わらび狩りをするのに携帯電話を使った
 例をはじめて知じた。
 山盛りになりたわらびの束を見せ合
 っている光景が浮かんでくる。

振りあげし筍産毛の光けり 岩間芳子
 山裾に田園風景雉の声 畑佐俊作
 散歩道イヌフグリ咲き杖遊ぶ 柴田文花

七客

花吹雪格子戸すかし紙帳場 額久峰
 春うらら東坡の句碑の細き文字 加藤晴月
 合羽着て受粉作業の梨畑 村瀬昇竜
 人口の雪のグレンデ客疎ら 畑佐美泉
 錆鎌を研ぐ小流れの温みけり 吉田亀笑
 墨太きうぐひす餅と菓子処 早津郁夫
 ちぐはぐな難聴会話山笑ふ 波多野寿扇

三光

〈人位〉

席変えてホームの夕餉二月尽 藤井 修
 〈評〉 追記に依れば一昨年妻を亡くされ
 娘さんの住んでおられる瀬戸市のホーム
 に入所されていると、ホームでの席替え
 があじて楽しい夕餉が訪れたのだ。
 席を替えたことと時の過ぎてゆく早さ
 がつたわじてくる。

選者詠

兄よりも弟が勢ふ追儼かな 五月

注意事項

樗流俳句も良吟がつぎつぎと投句されて
 来て歓びにたえない。
 投句の中には「あ、この句どこかで拝見
 したぞ」とか「類句に近いな」と言いた句
 がありました。
 生活の中に生まれたあくまでも自作の句
 を投句して下さい。

樗流俳句次号応募要領

一、夏季雑詠（ひとり三句）

一、×切

一、用紙 郵便ハガキ（句料無料）

一、所属社名、雅号名記

（樗流会員変名不可）

一、投句所 〒504-0934

各務原市大野町1-120

岩田数美

電（058）242-2254番